

いの流水俳壇

「当季雑詠」

間 浩太 選

下町に風つれ歩く風鈴屋

岡本とも子

(評)風鈴を知らない人はいないと思うが、中国から伝来し、初めは上流社会のものだったが、江戸時代から庶民の消夏法の一つとして広まっていった。

風鈴売りは掛け声を出さずに、チリンチリンと鳴る風鈴の音を合図に町を回った。この句は、風鈴の音をつれ歩く、と言うところをチリンチリンと暑気忘れさせてくれる音を出している「風つれ歩く」と、表現したところが、よい句と言える。「風鈴の処に風のありにけり」の句があるが、同じ考え方、気持ちであらう。

蝉の穴長き孤独をのぞきけり

刈谷 志津

(評)蝉が成虫となつてからの地上の命は、極めて短く一週間ぐらいのものであるが、幼虫の地中での生活は、数年ないし十数年を要するといわれている。樹皮に産み付けられた卵から孵化した幼虫は土中にもぐり、木の根の汁を吸って成長する。幼虫の地中生活は種類によっても違うが、油蟬で七年ともいわれる。

地上生活の短さと、地中の生活は気の遠くなる長い期間であり、この句のように数年以上群れでの生活でなく、孤独の生活であり蝉の哀れさ悲しきを感じさせる。蝉の幼虫が地上に出たときの穴を見て、蝉の生涯を考えてそのはかなさ、哀

れさを詠んだ作者の優しさを感じさせる句である。

勉学の牛歩もたのし夜の秋

伊藤 萩甫

(評)「夜の秋」とは、秋の時期、秋の季語と思えますが、晩夏の時期のことであり夏の季語でもあります。夏も終わりになると、夜は涼しさが増し、虫の音も聞こえ始めて秋のように感じることを言う。俳人の季節感の繊細さが生み出した季語である。この句は老齢に近くなった作者が勉強するのに、牛の歩みにも似て進歩しないけれども、晩夏となり夜は涼気も感じるようになって、勉強する環境もよくなるので歩みは遅くても、兎に勝った亀のように怠けず休まなければ進歩するので頑張つてと応援します。

峡暮らし耳鳴り消しぬ蝉しぐれ

竹崎 光子

(評)作者は少し耳鳴りを感じているのでしょうか。街でなく比較的静かな峡の生活では耳鳴りが気になるときもあるのだでしょう。多くの蝉が一斉に鳴きだすと、然と驟雨がきたような感じがするので、時雨と言っている。

鳴くのは雄ばかりである。

にいにい蝉、油蟬、みんな蝉の順序で鳴くが、熊蟬が最も大きくシャワーとやかましく鳴き立てる。烈しく鳴いたときは、テレビの音も聞こえなくなり、畑の近くに木があると、畑仕事をしても話し声が消えるほどで、この句のように峡では蝉時雨のあるときは、耳鳴りなど打ち消され、聞こえなくなる。俳句で蝉時雨が、いろいろな音を消すと詠んでいるが、耳鳴りを消すと詠んだのは珍しい。

塩怖し身なれば甘し一夜漬け 岡村 嘉夫

老鶯や野良着が畦に乾きをり 松尾満津於

月に浮く風の夕管揺れやまず 友草 水月

炎天やトンネルの中節電す 森岡 照月

古団扇節電節水雲流る 片岡 包女

澄み渡る空に蜻蛉の羽の音 竹崎たかひろ

遠花火消えて余生の夜の静 大川 節弥

あきあかね胸張りてきしこの空間に筒井 正子

信楽焼のためき風鈴ふぐりの音井上 郁子

夕暮れに夏うぐひすの鳴きかはす 弘瀬うき子

日照雨色の分かれし夏の山 川村 博子

飄々と哲学者めく案山子かな 津田 久美

朱の入りし亡妻の蔵書を曝しけり 間 浩太

次 題 「当季雑詠」五句
締め切り 毎月五日

投句先

社会教育課

いの町3597

893-2012



ドメスティック・バイオレンス(DV)とは?

ドメスティック・バイオレンスとは、配偶者や内縁関係等にある人に対して振られる暴力のことです。暴力には、殴る、蹴る等の身体的暴力に限らず、「バカ、アホ」など人格を否定するような暴言を吐く等の精神的暴力や、避妊に協力しない等の性的暴力、外出を禁止するなどの社会的暴力、また生活費を渡さないなどの経済的暴力などがあり、これらの暴力は明らかな犯罪行為を含む人権侵害で

す。こうした暴力は繰り返され、エスカレートしていき、この暴力を見て育つ子どもの心にも大きな影響を与えます。

また、DVは大人だけの問題ではなく、恋人同士の若者の間で起こるDV(デートDV)もあります。

暴力から逃れたい、心理的な不安を聞いてもらいたいなど、もしあなたや周りの人が暴力で悩んでいたら、ひとりで悩まず勇気を持って高知県女性相談支援センターにご相談ください。緊急の場合は最寄りの警察へ。

おなやみ

高知県女性相談支援センター 電話 833-0783

電話相談時間 月～金 9:00～22:00 土、日、祝日 9:00～20:00
面談相談(予約制) 月～金 9:00～17:15